

<メディアウオッチ>

日本人ジャーナリストが報道の自由「世界の100人」に

2014年5月5日 上出 義樹

警察の腐敗や排他的な記者クラブ制度に挑む寺澤有さんが選ばれる



フランスに本部を置く国際的なジャーナリスト団体「国境なき記者団」が初の試みとして、自由な報道のために戦った「世界のヒーロー100人」を選定。日本からは、警察権力などの腐敗を鋭く告発してきたフリーランス・ジャーナリストの寺澤有さん（47）がただ一人、選ばれた。寺澤さんは、警察権力だけでなく、日本の排他的な記者クラブ制度にも厳しい批判の目を向けており、そのためか今回の寺澤さんの快挙に対して、私の知る限り、日本のマスコミ大手各社は無視を決め込んでいる。

「国境なき記者団」による初の取り組み 日本人の受賞はただ1人

この「世界の100人」は、「世界報道自由デー」の取り組みとして5月3日に発表された。中近東諸国や中国、ビルマ（ミャンマー）、ロシアなど、言論の自由が脅かされている国々や地域で政府の迫害を受けながら汚職追及などの取材活動続けるメディアや記者、カメラマンのほか、米国をはじめとする先進国で政府の盗聴や情報隠しを告発するなど、さまざまな形で報道の自由や民主主義に貢献したジャーナリストや編集者らが選ばれた。

「警察から逮捕状なしに拘束されたりしたこと」と寺澤さん

日本人で唯一の受賞者となった寺澤さんは、主催者が発表した選定理由などによると、学生時代から警察の取材を始め、警察の組織的な腐敗や不祥事、天下りなどに関する数々の記事や著書を発表。その結果、懲戒免職や処分を受けた警察関係者は20年間で100人を超える。2006年には、彼のルポタージュを基に、警察の組織犯罪などの実態をリアルに描いた話題の映画『ポチの告白』（高橋玄監督）が制作され、その後、全国で劇場公開された。寺澤さんは当然ながら警察とは緊張関係が続いており、「警察官から殴られたり、尾行されたり、逮捕状なしに拘束されたりしたこともあります」と振り返る。

「特定秘密保護法」の施行停止などを求めて訴訟も

寺澤さんは警察ばかりでなく日本の主要な政府機関の利権や不正にもメスを入れ、さらに、公的な情報源への取材を独占してきた特権的な記者クラブ制度など日本のマスメディアの既得権益を厳しく指弾。最近では、安倍晋三政権により強行採決された「特定秘密保護法」の施行停止などを求めて、私、上出を含む他のフリーランス記者40人余の仲間とともに日本政府に対する訴訟を起こし、その原告団のリーダー役を務めている。

危険を顧みない取材と自由な報道追求する活動の両面で高い評価

「世界の100人」の選定に当たったアジア担当のスタッフ、ベンジャミン・イシュマル氏は、「政府の情報の透明性に対し懸念を示しているフリーランス・ジャーナリストは寺澤有だけではないが、彼は調査報道のジャーナリストとしての働きの上に、さらに、法的手段に訴え出た数少ないジャーナリストの1人である。報道の活動にとって、彼のような存在は非常に希少価値がある。また彼が取り組んでいる熱心な取材と併せ、情報がコントロールされている日本のメディアの状況、自由な報道の進展を阻む記者クラブ制度などに対する人々の危機意識がさらに高まことを願っている」とコメントしている。

日本のマスコミは寺澤さんの快挙を無視

また、寺澤さんは今回の快挙に関する私に取材に対し、「これを弾みに、特定秘密保護法の廃案や日本のマスメディアの既得権益に仲間と力を合わせさらに挑んでいきたい」と、今後の抱負を力強く語っている。しかし、自由報道の「世界のヒーロー100人」に日本からただ1人、寺澤さんが選ばれたことに対し、新聞やテレビなどのマスコミ各社はニュースとして取り上げていない。寺澤さんの記者クラブ批判などがその理由だとしたら、日本のマスコミはなんと度量が狭いことか。

(かみで・よしき) 北海道新聞で東京支社政治経済部、シンガポール特派員、編集委員などを担当。現在フリーランス記者。上智大大学院博士後期課程(新聞学専攻)在学中。